

令和 7 年度評価委員会の結果（令和 6 年度終了課題に対する事後評価）

<評価委員一覧>

氏 名	現 職 等
龍原 哲	東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授
山口 能邦	埼玉県山林種苗協同組合 副理事長
井原 愛子	株式会社 TAP&SAP 代表取締役
坂本 裕子	女性林業グループ「ちちぶ・やま姫」 会長

※所属は、令和 7 年 10 月現在のものです。（敬称略）

<評価結果>

研究課題名	ニホンジカ被害発生地等における植生回復技術の確立	
研究担当	森林環境担当	
研究期間	令和 2～6 年度	
研究概要	<p>(1) シカ侵入防止柵の設置費用は、網の材質がネット・金網にかかわらず立木を支柱に利用した方が安かった。破損状況を 4 年間調査したところ、破損が確認されたのは、支柱の種類にかかわらずネット柵だった。</p> <p>(2) シカが好まない木本植物（ウリハダカエデ、カジカエデ、オオバアサガラ等）の増殖試験（播種、挿し木、育苗）及び現地植栽試験を実施したが、いずれも期待した結果は得られなかった。</p> <p>(3) 緑化工施工地 6 箇所の植生を調べたところ、5 箇所でススキ等のシカが好まない草本植物により斜面が緑化し、表土の流出が抑えられていた。5 箇所のなかにはススキ等の間に周辺部から侵入してきたと思われる広葉樹等が自生し、森林に回復しはじめているところもあった。</p> <p>一方で(2)のとおり木本植物では思うような結果が得られなかった。</p> <p>このことから森林回復の手順としては、最初から木本植物で緑化を目指すのではなく、シカが好まない草本植物を生育させて表土を安定させ、その後、周辺部から侵入してくる広葉樹等の自生樹木を活用して育てていくことが、森林へ回復していく手順であると考えられた。</p> <p>この手順を踏めば、育成する森林は経済林としては期待できないものの、環境林として復旧することは十分可能と思われた。この考えをもとに「環境林整備マニュアル」を策定し、関係機関へ情報提供した。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：a
		活用見込み：a
	総合評価	A

研究課題名	地域資源を活用した特用樹の種苗生産技術ときのこ露地栽培技術の開発	
研究担当	育種・森林資源担当	
研究期間	平成 30～令和 6 年度	
研究概要	<p>(1) 特用樹のクローン増殖及び実生苗生産試験</p> <p>カエデ類の増殖技術確立のため、クローン増殖試験及び実生苗生産試験を実施した。クローン増殖試験では挿し木、接ぎ木及び組織培養の 3 種類の方法を試したが、いずれの方法でも増殖成功率は低く、カエデ類のクローン増殖技術の確立には至らなかった。実生苗生産試験ではイタヤカエデの育苗試験を実施し、冷温処理の方法を工夫することで種子発芽率を向上できることが分かった。</p> <p>(2) 新たなきのこ類の生産法</p> <p>廃菌床を培地として利用し、ハタケシメジの露地栽培が可能か検証した。マイタケ廃菌床及びシイタケ廃菌床をそれぞれ堆肥化したものを培地として用い、殺菌手法や米ぬかの混合比率などにより 15 処理区を設けて、ハタケシメジの栽培試験を実施した。その結果、子実体発生数はわずかであり、そのほとんどが十分な大きさに発達しなかった。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：d
		活用見込み：c
	総合評価	C